

千刈狸の呟き

～ あのところへ～

孫七狸

冷たい雨はいつしか霏々と降りしきる雪となり、呆然と立ち尽くす友人の頭を白く変えていった。昨年の10月末、鳥海山四合目の大清水園地でのことである。2年余りの空白の後にやっとたどり着いた地にあったものは一否、あるはずのものが忽然と消えていたのだった。

平成25年7月の梅雨時の集中豪雨は鳥海山百宅口に至る手代林道を寸断、橋脚を洗い流して通行止めにした。そのうちに、と思っていたが秋になっても復旧のメドが立たない。毎年夏の恒例であった大清水小屋での宴は25回を超え、いつものメンバー4人が集まっては釣って、登って、飲んでつぶれての大騒ぎ。2泊3日が1泊になっても何とか続いていたのだが、ついに中断の憂き目に一思えば大清水小屋との付き合いは40年余りの長きにわたる。高校時代の夏合宿に始まり、大学、鳥海町の診療所勤務時代を経て今も尚。冬季の数mの雪にも耐え、老朽化で秋田県が隣に新たな山小屋を建てても、旧小屋を愛する地元山岳会の人々に維持管理されて命脈を保っていたのだ。

その年の暮れ、忘年会に集まったメンバーは口々に夏の清水小屋抜きなどありえない、収まりがつかないなどと咆えまくる。そこで立てた作戦は一大清水園地の下方を流れる朱ノ又沢の水は下流の取水口から導水管をへて隣の赤崩沢に注ぎ、布沢と合わせて鳥海川の袖川発電所に達する—この赤崩沢から導水管上の杣道を逆に辿り朱ノ又沢を遡行して大清水に至る、というものである。

明るる年の6月、作戦通りに赤崩沢から入溪、1時間ほどで朱ノ又沢の取水口に至るも、前日の雨で沢は濁流増水、加えて地元の人の親子熊の目撃情報にビビってあえなく撤退。次いで8月下旬、同じルートで再挑戦。朱ノ又沢に至り快調に遡行し枝沢2本を過ぎた地点から右岸に落下する5m滝を高巻いて台地に取り付く。二万五千分の一の地形図で見当をつけながら猛烈な藪こぎを汗だくになって1時間余り。が、時間切れ—小屋は何処だ。10月下旬、キノコ採りのついでに3度目の挑戦も沢の大増水でこれも断念。その年の忘年会もまるで盛り上がりせず、沢からの取り付けルートの問題との認識で一致。20年以上も前に小屋から朱ノ又沢に下った記憶を辿るしかない、行かずにおくものか。

平成27年春になっても復旧の報は届かず、7月中旬に4度目のアタック。朱ノ又沢を遡行して1時間余りの地点、メンバーの「見覚えがある」と一致した小沢から台地のへりに取り付き、方角の見当を付けつつ小屋を目指す。途中の斜面では踏み跡らしきものも見られ一同緊張。だが、折からの小雨が降り止むといつしか一帯は深い霧の中に、すぐ横の友人の姿すら覚束無く、悄然と立ち尽くして時間だけが過ぎていった。帰途には友人が2mの高さから滝つぼに転落するというおまけまで。一体大清水小屋は何処だ？正直、叫びたい心境だった。

—そして秋も終わる頃、知人から林道復旧との知らせを受けて車を飛ばして訪れたのが冒頭の場面なのである。小屋跡はきれいに整地されてベンチまで設けてあった。念のため、園地から朱ノ又沢に下ってみたら誠にあっけないほど簡単に、以前の挑戦で残した目印の赤布も確認しつつ沢に到達。足かけ3年に及ぶ彷徨・迷走はこうして唐突に幕を閉じた。

それにしてもこの間の我々の焦燥感や混乱、寄る辺のなさといったら—もし単独行動で舞台も自宅の近くならば—これはまさしく「徘徊」といわれるものに違いない。心優しく心配性の家人に病院に連れて行かれ、善意のかたまりのような医者はきっと薬を出してくれるであろう。

人の記憶、ことにエピソード記憶は日記帳のようなもの、自分史でもある。毎朝起きる度に自分は誰であるのか、ここは何処なのか（無意識のうちに）確認作業をする。いつしか日記帳は傷んでまさに葦編三絶、綴じ糸が擦り切れて頁がゴソッと抜け落ちると途端に自分の拠り所を失う。ここは何処だ？覚えのある場所を焦って探して回る。人は目的地なしに歩いたりもしない。ただ、そこに辿り着けないことがあるだけなのだ。そして我々にとってあの小屋が帳面の綴じ糸のようなものであったことは間違いない。

この夏、皆で大清水に集い小屋跡にテントを張る計画を立てている。各自のうちに傷んで頁が抜け落ちかけた日記帳を抱えて一夜、星を見ながら昔のように酔いつぶれるまで飲もう。そして朝になったら、それぞれの黄昏の日々を送るであろう場所に戻っていくのだ。 (終)